

- ◎8:00 北小松駅を出発。いつもより1時間早い電車に乗った。茨木駅のホームでスマホを見ると真鍋さんから、「足の具合が 悪い 欠席」と連絡があった。京都駅を乗り換えのため歩いていると、もうひとりのノンちゃんに肩を叩かれ二人で湖西線の電車に乗った、3人が2人になってしまった。
- ◎9:20 涼峠到着。駅のホームにも雪があった、登山口までの舗装道路にも雪が残っている、登山口あたりでは地面が見えない、30分も登ると50センチとはいかないまでも靴が雪に埋もれだした。途中の電車から見た琵琶湖バレー辺りは陽が照って雪が白く輝いていたが、進むにつれ曇りだし山が見えなくなった。涼峠までは白く曇った空、「晴れの 予報なんだけど」とぼやきながら水をガブリパンをがぶり。
- ◎10:45 ヤケ山に到着。少し前ぐらいからお陽さんが出てきた、「おお 晴れてきた 青空だあ」雪の白には青空だねえと勇んで登った。涼峠でチェーンアイゼンをヤケ山で6本爪に切り替えた。ノンちゃんはワカンを着着。「比良の山は ワカンがいいですよ」オレはワカンとの相性が悪いのか今回も持ってこなかった。
- ◎雪で潜るところも出てきた、ズボリ足が隠れるほど潜るところも出てきた、エンヤコラがんばれ、一歩いっぽ登っていく、「ラッセルは しんどいねえ」ピッケル君のおかげで高度を上げていく。去年の3月初旬の雪も同じくらいか、もう少し多かったか、ソロで登って釈迦岳直下で断念して引き返した。今日もなかなかしんどいが、ヤケオ山をピークに、中井新道という未知の道を下る予定なので、もう少しである。琵琶湖から雲が山の斜面をはい上がってきている、琵琶湖を含め下の方が見えない、鈴鹿の山々は見えるがその間は、雲海状態、とはいえあの海のような恰好のいい雲海でなくただ曇っているだけなんですけど・・・。
- ◎雪底の上を足跡が続く、ウサギかな、イタチかな、ちょっと近づきたいが、雪底を踏みぬいた落ちたでは格好がつかない、くわばらである。天気予報通り暖かい、ダウンも防寒具もザックにしまいシャツ3枚で歩いている、汗をかいて湿っている。朝は防寒手袋でも冷たかったが、今は素手でピッケルを握って、雪に突き刺して登っている。これぐらいの雪の時はピッケル君がおおいに役にたつ、靴のつま先を雪にけり込んで一歩、ピッケルを突き刺し手の力で一歩、ゆっくり一歩、雪の山をエンヤコラ。
- ◎1:00 ヤケオ山到着。先日もらった敷物を広げて座りコップに粉末スープ、湯を入れゆっくり飲んだ。今日は寒くはないが、温かいスープが染み渡る。いつもの玄米ごはん野菜炒め、これまた美味い。後ろで人の足音、「今日初めて会った方です」とチラリうしろを見て言う尻からノンちゃんが、「あれえ 三木さん」と叫ぶ。なんと偶然の出会いらしい、久ぶりにお二人の話が弾む、「ところでこれから 未知の道 下りますが ご一緒にいかがですか」「ああ いいですよ ついていきます」ということで、3人で下ることになった。
- ◎中井新道は、オレ初めての道である。15年ぐらい前、「え こんな所から 登ってきた人が・・・」12本アイゼンを着けたあんちゃんが一人登ってきた覚えがあるが、この道だったかもねえ。ノンちゃんはずばる前に、北小松から登っていた方に、「一緒にさせてもらっても」ということでここから下ったらしい。オレはパソコンで山の地図に人の軌跡が載っているものを調べ、地理院地図にその軌跡を写し込んだ。その写し込んだ地図を今度はスマホの山の地図にも写し込んだ。この二つがあればなんとかなるだろうと下り始めた。
- ◎「まずはまっすく尾根道を 東に 向かって、ちょっと 南に振れて 761M地点まで 下りましょう」ズボズボ雪の斜面を下っていった、下りは楽ちんである、あれだけふ～ふ～言っていた登りだが、下る時は大股に雪に靴を潜らせ、それ行けやれ行けですいすい歩ける。761M地点までは苦も無く来れたが、ここから右に折れるのだが、樹林地帯で斜度がきつい、「あれれ 道がわからない」紙の地図を見てスマホを見て、「たぶん こっちだけれど だだっ広い斜面のどこが正解なのか、「それいけ いやいや こっちかな まさか戻れないよね」右往左往である。樹林地帯で、木の上に乗っていた雪がバサバサ落ちた跡は小さい雪崩のあとのように表面がボコボコになって地形が読めない。苦労して相当下ったあたりに道らしきものがうっすら見える。「これこれ この道 これで正解」なんと、ちゃんとした登山道がある道だったのだ。新道というからまったく踏み跡もない所かと思ったが、昔から使われていた道、今は人が通らないから、荒れて倒木だらけだが、立派な登山道である。ふうふう言いながら、近江今津駅には5時半に到着。9時間半の山行でした。

◎ オレの友人にけっさく奴が居る。その方、「そういやあ そんなやつ おるなあ 世間には」「あんな感じの おっさん おるぞ」というので大袈裟に戯曲風に現してみようと試みるが、フィクションなんてできないオレなので、ぎこちないものに・・・、どうなるやら。もっともこの方、社会的に地位も名誉もある方、表社会を威風堂々と歩いてこられた。オレのように地位も名誉も金もなく、上目遣いにすがめで見るアウトサイダーではない。そんな劇場である。

◎「きみい 声がデカイ 元気な証拠だよ」3人で多少高級なホテルのラウンジで食事をしていた。80歳前になり、友人たちが次々会えなくなってきた。もちろん亡くなったやつもいるが、足が痛い、腰が痛い、どこやらが悪くて出ていけないという方々が増えてきた。今日集まった3人はまだ比較的元気だが、これもいつだれが沈没するやら秒読み段階である。「きみい 声がデカイ 元気な証拠だよ」こういったのはこの声のでかさ、声の張りにいささかの嫉妬とちょっとばかりの誉め言葉として言った。

「お そやねん ここの店でも前に注意されたことがある」「お客様 もう少し小さい声で お話してくださいと 言われた」とすぐに声を細めたがそのすぐ後には大声の長口舌が始まった。

「おれなあ 職業柄 大声で話さなあかん ちっさい声で 読んでたら 誰にも聞こえん」

「こらあ おまえ いてもたろか オレを 誰や思っとる なめんなあ とこの男は 大声で 恐喝しております」街の不良小悪党の雰囲気さながらドスを効かせて語る。

これもなあ、今のように抑揚をつけ、ほんとにこの男が恐喝に使った言葉を、間をたっぷりにとってリアルに再現すると、まわりはシンとしてその場の臨場感が出る。判事も検事も弁護士も、奴らの心に突き刺さる。

「ジャッジの場は劇場じゃ 人の心を揺さぶらねば」

「こらあ おまえ いてもたろか オレを 誰や思っとる なめんなあ」

この声が響き渡るとまわりで食事する人たちがそとこちらを覗き見る。これは聞いているこっちもいささか恥ずかしい場面である。

◎「ところで 君い 先日セクハラで訴えられていた 法曹屋・・・」

詳しくは知らないが、ネット氏に聞くと、女性検事が酒で酩酊状態になったところ、その上司の検事が車に乗り込み、女性検事を官舎に連れ込み性的暴行をしたということらしい。その検事は、「これで おまえは 俺の女だ」と言ったという。TVドラマの時代劇物で、悪徳豪商の越後屋のオヤジやら、悪代官の五郎衛門殿が、女の肩を抱きそういうセリフを吐いているのを思い浮かべる。「そんな時代劇の 典型みたいな セリフ いうか この時代に」「被害者の 女検事 酒に酔って 酩酊」「だらしなく 酔っぱらうな」「えええ 彼女も役者か 時代劇か」なんともはやお粗末な劇場である。

◎悪人だらけの世の中というが、小悪党から極悪人までたくさんいる。「ちょっと魔が差して」と言い訳するが、魔なんてものはちょっとの間もありゃしない。

こそこそ少しだけ盗んでしまった、犯罪にもならない額だけどパクってしまった。こういうのは誰もが持っている脛の傷風汚点かもね。昔の刑罰に十両以上の窃盗は腕を斬り落とすとか、どこか地の果てに流されるとか聞いたことがある。

人の道に反することをしてしまった。これも巷に毎度のように流れる瓦版のネタ。欲張って我を忘れ人を押しのけてしまった。人を傷つけ命を断ってしまった。倫理に反することをしてしまった。人の尊厳を侵してしまった。嘘八百並べ立ててしまった。

私はこれは悪だと思わないが、世間が悪だという、法律が悪だという、こういうことも多々あるぞ。この社会、オレが一人で生きているのではない、まわりにたくさんの奴が居て、ルールがあり、決め事があり、頭が居る。これを侵せば石の礫が飛んでくる、当たれば痛い、あたりまえじゃ。

◎8 時前に北小松駅に着く電車、「ええ えらい人だ」車掌さんのアナウンスで、「マラソン参加の皆様 がんばってください」若者たちで満員である。友人も、「走る」と言っていたが今日だったのだ。皆さん電車で来て何処で着替え、荷は何処に置くのか、下らぬことを心配している。

◎8:00 北小松駅を出発、天気はいい、駅の扉に影が映り明るく輝く、薄い上着を含めて3枚で寒くない。外に出ると青空が見える、電車の車窓からも山脈がくっきり見えた。天気予報氏が、「今日は 登山には よくないよ」とおぬかしになる、「こんなに天気がいいのに なにに 文句があるのだろう」と不思議に思っていたが、上に登ると冷たい風がきつい、先週の、「暖かいね お陽さんが背中を温めてくれる」というのに比べ、上に登るにつれ、防寒具を着込みそのフードを被った。

◎9:10 涼峠に到着。先週と比べここまでは雪が無い、ちょっと手前で雪を踏みつけて歩いたが、ここから先は地面が真っ白で見えない、とはいえズボ足で歩けそうだが、冷えてきたので防寒具を着た。

◎11:20 松の木までやって来た。ヤケ山でワカンを着けた。5年以上使っていないが、すぐに装着できた。「ええと まずはかかとを入れて バンドをぐるり回して 足先を左右に、最後に絞める えいこら 絞める」ワカンは高原では力を発揮するが、上り下りは自信がない。すぐに下り、ズボ脚同様かかとを効かせて踏んでいくとなんとかブレーキが利く。なんと今日はヤケ山からトレースが無い。何日か前のトレースも新しい雪でまったく見えない、「ええい ここだろ 間違っていないやろ 行ってまえ こっちじゃ」下って鞍部にやって来た、さ、ここから登りである。「けこんだら いいよ」とおぬかしになるが、ワカンを蹴り込むと靴とワカンがいささかづれて、ワカンの位置がおかしくなった。しばらく行ってワカンのベルトを緩め、靴の位置を直したベルトを締めた。わかったことは雪の上に平らに踏みつければいい、蹴り込むのはいけない、ただ登り斜面で雪に刺さらないとズルリ滑り落ちてしまう。登りの斜面、先人の踏み跡が無いと、まっすぐ上がりたじグザグなんて切っておられない、と焦っている。急な斜面でズルリに会い、ピッケルを刺して力まかせに登っていく、まだ大丈夫、これが後から効いてきた。琵琶湖が見える、風がきつい、防寒具のフードを被り、真っ白い雪の中、ギラギラ太陽、サングラスを着けた。

◎「たいへん 大変 らっせる ラッセル あああ しんど」である。昨日の予報氏、「晴れるが 風がきつい」もうひとつの予報氏、「登山には 適さない Cランク」晴れなのになぜランクが低い、「そらあ こんな風 冷たい風の日に 登りたくないよ ねえ」と納得させてくれる。「とにかく 2時には 釈迦岳に つきたい」

◎12:20 ヤケオ山まで登ってきた、先ほどまで風はきつかったが、ここにきて収まってきた。とはいえ防寒具のフードを被らないと冷え冷えの寒さである。先週より30分早い到着だ。下から見上げる斜面はなだらかに見えるが、一步一步進める斜面は、えっちらおっちらである。後ろから撮ってくれた動画を見ると、「なんと めるい歩き方 牛歩戦術じゃあるまいし もうちょい すいすい 行けんか」と歯がゆくなるような歩の進め方だが、登っているオレは、これが精いっぱい歩き方、ドッコイショの頑張りである。

◎1:45 やっと釈迦岳到着、北小松駅から歩き始めて6時間もかかってしまった。ヤケオ山から1時間半近くかかってしまった、もうバテバテである。雪のない時期はヤケオから釈迦まで40分のコースタイムだが倍以上時間がかかっている。「ああ ばてた 足があがらん まだまだ くそおお」ぼやきながら一步一步進んだ。途中で、人の声を聞いたような気がしたが、空耳かとも思っていた。釈迦のてっぺんは大ぜいの人の踏み跡がある。「ツアーで スノーシュー 体験団が 居られたのかもね」今日はおにぎり2個と粉末スープだ。今日の山が急に決まり夕方買いに行くと、売れ残ったタラコとサケしかなかった。パンも食べ粉末コーヒー、白湯も飲み満腹である。上を見ると琵琶湖側は薄ぼんやりだが、日本海側は真っ青である。

◎あとは下るだけ、バテバテの身体、ぐずぐず溶けかかった雪、ワカンをも木の根や岩にひっかけたら滑落だと慎重に歩いた。「この下り 3.4回休憩しないと もたないねえ ああ しんど」である。

◎4:10 元ケーブル駅までやって来た、無事下山だ。トレースの無い斜面を見た時は、「こらあ 途中 引き返し か」と思ったが、相棒のノンちゃんのおかげでここまで来れた。5時過ぎの電車、9時間の山行でした。

◎「キャツは ぼちぼち 来てるね ボケが 認知 健忘・・・」なんて言って人のことを嗤っていた。「オレはしっかりしている 身体も大丈夫」なんて笑っていた。ところが二日続けてとんでもないことと、大袈裟に騒ぎ立てるほどの事ではないにせよ、「くそお 失敗した チョンボした」が続いた。

◎先日健康保険金の支払い詳細が役所から送られてきた。オレは半年で6万円ぐらいたが去年は大腸内視鏡手術があったのでプラス11万円である。この数字は健康保険から医療機関に払われた数字、オレの場合は個人で開業をしている医者に支払われた金額である。ちょいまって、オレ自身が医者の窓口で払った少々のお金の加算しなければいけない。

◎今2か所の医者に定期的に通っている。ひとつは内科。血圧の薬：初心者用だというアムロビジン0.25を毎月行ってもらっている。窓口では500円だが、5000円ぐらいたが毎月かかる。もうひとつは三月に1回の歯医者健診、1時間弱ゴシゴシされ窓口では1000円強だが、10000円強がかかる。「オレは病気が無い 飲む薬が無い お薬手帳なんてない」なんてほざいているがこれがちょっとでも長続きするようにしなければならない。ほざいているオレでさえ、1年間に10万円ぐらいたの医療費がかかるのである。10万円の内、オレ負担が微々たるものなので、平気な顔をしていられるが、これ以上病気がやってこないように頑張らねば。オレのように、「ま 健康だ」というものは少ない、ほとんどの方があちこちの医者に掛かり、その方たちは通勤するように医者に通っておられる、これらの費用は天文学的だと恐れている。脳や心臓、内臓の病気に罹り大手術、長期療養、次から次に病気が出てくる、こういう話がまわりで増えだした。とにかく病気にならないよう頑張らねば。

◎ボケの話がそれてしまった。先日、独居老人である友人が10日ほど入院して手術をするというのを聞いていた。雨の朝、「えらいことした 今 駅にいる 鍵をかけ忘れた かな 見てきてくれない かな」という。あとから考えれば、「時間があるなら タクシーで 往復すりゃ すむ話」彼は気持ちが動揺をしていたのだろう、オレもそれを聞き、「すぐ そっちに 行くから」と電話を切った。朝飯途中だったが、食べ物をほおりっぱなしにして、カッパの上下を着、自転車に飛び乗った。「多分 掛けたと 思うけど」「じゃ 鍵 預かって 午前中に 車で 家に行ってみる」彼から家の鍵を預かってそれをカバンに入れた。途中近所のスーパーで食料品を買い家に帰った。しばらくして、「ええと 鍵は」「鍵 カギ 無い ナイ まさか どこで落とした」大慌ての真っ白である。カッパの上下にはポケットが無いのでカバンに入れた、入れたと思ったがその場で落ちたのか、自転車で、あそことあそこを通過して帰ってきた。スーパーで支払う時なにか音がしたような気がして振り返ったが、何もなかった、もしや・・・。

◎慌てそのまま自転車でスーパーに行った。「おねえさん すみません ここで支払いの時 鍵 落としてなかった・・・?」「ちょっとまって カウンターに来てください」「どんな種類の 鍵? 特徴は 証拠になる事 言ってもらわないと 他の方のモノかも わからないので」おっしゃることはごもっともだ、彼から預かる時に、鍵そのものを見てなかった、手から渡され見もしないでカバンに入れた、「鍵一個じゃなく なにかが着いたぐらいの 感触しかない・・・」「こまった」「困りましたね ちょっと相談します」遺失物の鍵を貸してもらい友人宅に行き、鍵があっていたらオレもOKでスーパーにその旨電話を入れる、その鍵じゃなかったらスーパーに返しに行ってオレは再度鍵を探さねばならない。慌て家に帰り、鍵をもって車に乗り込み、友人宅に行った。ドアは鍵がかかっていた。鍵をカギ穴に差し込んだ、入った、振じった、解錠できた、またすぐ施錠して抜き取りドアが締まっていることを確認し、胸をなでおろして帰った。

鍵を失くした、この失態は何度かあった。何度か失敗して以来、「鍵は ズボンのポケットに入れる ここが一番安全である」以来無くしたことはない。ただ今回ポケットの無いカッパ、これはいかん、いかにカッパと言えどもポケット付きを買わねば。

◎友人のキヌちゃんからメールが来た。キヌちゃんとかんちゃんの三人でよく鳥談義をしている。オレは毎日、それこそ通勤のように通っている安威川河川敷から見る、中・大型の鳥に話しばかり。かんちゃんは、探鳥や鳥観察ではセミプロの強者、カモの名はすらすら幾種も出てくる。カモと一口に言っても、雌雄、老若、発情期によっても、形や色が違うというややこしさだそうだ。キヌちゃんは大きな庭に大きな樹があり、そこで畑もしている、自然に接する機会が多い。老人のようなことを言っているがまだ若い。

3 日前からメジロが来なくなりました。枇杷の木にもいません。枇杷の花も散ってしまい、暖かくなってきたので、山に引っ越したようです。庭のミカンの餌台にはヒヨドリだけがやってきます。

またジョウビタキも来なくなりました。

畑仕事をしても来なくなったので、虫を見つけてもやる相手がいないのは寂しい。

庭には水仙が咲き、ユキヤナギが葉と花を咲かせ始めて、白木蓮もつぼみから花を咲かせようとしています。もう春間近です。こういう3月中旬の春を思わせる時期に冬鳥は旅立つのですね。

歳をとると、身近な木や草や花や鳥の四季の移ろいがよくわかる。昔から目の前にあった自然界の出来事ですが、若い時は見ようとしないので見えなかった。老い先短くなるとこういう感覚は鋭敏になってきた。

◎オレが、「老人になった ジジイになった」と思うようになったのは、75 歳を超えたぐらいかな。オレは非常識にのほほんと日々を送っているせいか、老いを感じるのが遅いのかかもしれない。飯を食い、笑い、歩けば困ることもない、老いを感じないのかな。目の前にはそれこそ色とりどりの色がある。青い空に樹々や草原の緑がある。アルコールの量が減り、「酔っぱらった 気持ちがいい 今日最高だ」なんてことは無くなったがそのぶんまわりの空気が楽しさを、おもしろさを運んでくれる。

◎ポケの話となりゃあ、「わたしは こんなことがあった」「おれは こんな失敗を して しもうたがな」嬉しそうに披露するジジババ連である。ただこのジジババ連、また一人またひとりと欠けていく。これは自然の摂理、あがなえないことで順番もあったものじゃなく、いつの間にやら消えていく。

「え この間まで 元気そうに ワインの話 してたのに」「いやいや チューブに繋がれ 寝たきりらしい」こういうショックな話も聞こえてくる。会ってないと、本人を見てないと、その元気度がわからず、メールの文章を読んで、「相変わらず 馬鹿 言ってやがる」と笑っていたが実はこういうことだという、ちぐはぐな話。目の前の本人と会いまみえないのがいいのかかもしれない、流れてくる文章なり音なりが風に乗ってやってくる方が本人を感じて美しい。

◎その翌日家族から、「図書館に 行って ほしい」と頼まれた。「おお いいよ」返す本と本人カードをカバンに入れて出かけた。茨木に“おにクル”という施設ができたが、これがすごい。大きなビルでその中が全部市民解放の図書館であり、雑談のできるソファがある。市の施設はおおよそは貸会場だが、この施設は用のない方々もちょっと涼みにとか、寒いのでと入っても文句が言われない施設である。おにクルはオレのモノでもないがちと宣伝。意気揚々とエレベーターでその図書館受付の5回に上がった。まずは数冊の本を回収ボックスに入れて返し、カードを出して予約の本のシートを入手し書庫に入った。予約の本は棚にそれぞれ並んでいる、A-1の棚では〇〇本を探し、A-3の棚では〇〇本を探し、「えええ もう一冊がない」座り込んで探していると、50歳代女性が、「お手伝いしましょうか」と声掛けしてくれる。「無いのは 〇〇本ですが」「あ ここにありました」「あ ありがとう」係りの方だと思ったら一般の方である、もたもたする老人に声をかけてくれたようである。さて機械で本を借りる手続きをすませ全部カバンに入れたつもりだったが、一冊その機械の所に忘れたようで、家に帰ると図書館からその旨の電話がかかったという。慌てその本をもう一度自転車に乗ってもらいに行ったという失敗談であります。

◎「ええ 鳥の話だよ 今 安威川 河川敷 雨の中 河原に出てきた」

今日はね雨が降っている。予報氏の話では、一日中、雨だらだら降るそうだ。この何日間は雨が多い、もう続けて3回ぐらい長靴を履いて河原に来ている。およそ一日中雨だという日は少ない、御前か午後には雨が止むもので、その合間をぬってうまく河原に来るよう調整しているが、一年に何度か全く降りやまない日がある。そういう日には河原に来るのをあきらめるが、ま、皆勤に近い状態でやってくる、というオレ、わらう。そんなわけで今は上下のカッパ、フードはしっかり被りびちゃびちゃの河川敷遊歩道を早足で長靴が進んでいる。長靴は水溜まりには強いが、サッサとてくてくは歩きにくい、サッサはジョギングシューズでなきゃ。

◎先日来の鳥の話の続き。前回も書いたように、「オレは 安威川河川敷から見る 中・大型の鳥の話ばかり」安威川土手の階段を気をつけ一段一段降りていく、この階段も、最近はサッサと降りられない、ゆっくり一段ずつ踏みしめて下っていく。雨続きの今たっぷり水溜まりがある。「お さっそく カモの首が見える」茶色い感じのカモ君、草むらで何かをついばんでいる。あれは何ていう種類なんだろうね、かんちゃんならすらすら教えてくれるが、ま、普通のカモである。草むらにいるカモは人が近づくと一羽が警戒音を発しふわり上へ飛びあがりそのまま横異動で水の中にばしゃり逃げていく。ところが最近、人の多いところであまり人を警戒しなくなって逃げずにそのまま何かをついばんでいる連中が居る。これは“パンくずおじさん”の仕業である。おじさんが一斤ほどのパンをもってやってくると、鳥たちが集まってくる。スズメにハトはあたりまえの事、カラス、サギ、カモ、カモメとやってくる。最近見なくなったが、ユリカモメはふわり投げられたパンくずを、シュシュとホイッと、いただいていた姿を思い出す。今ネットでカモいろいろを見たが、なにがなにやらわからないが、日本に一年中とどまる留鳥は別にして9月ごろにやって来て4月ごろに帰るらしい。アヒルはマガモが家畜になったものって、知ってたあ？共に、DUCK だって。あのとろとろカモの飛翔速度はなんと、時速120キロだって。半球睡眠と言って、寝ながら飛ぶ鳥、渡り鳥がいる、一か月ぐらい飛び続けるぐらいへいっちゃら。キョクアジサシ君、南極と北極を渡るんだって、げええ。

◎え、こんな雨の中、誰もいないと思っていたら、いつもの魚釣りオヤジがいる。このオヤジね、最近顔を見るようになった人だけど、鯉をよく釣っている。河川敷に世帯道具をいっぱい広げ、竿も三、四本も立て掛け、撒餌の袋から何かを撒いている。一番感心してるのが、大きいタオルのようなシートに寸法が刻んである。そのシート、オレが見るときはいつも水で濡れている。ということはオヤジ、まさにでかい鯉を釣ったばかりでそのシートに鯉君を寝かせ写真撮影の後SNSに送信したのかな。今までこらあたりに陣取る鯉釣の人たちは、竿一本を構え座ってじっくり水面を凝視している、茶を飲んで、なにかを喰っている、今の季節、防寒具のフードを被り丸くなって座っている。ところがこの名人と思われるオヤジは、長靴姿、ジャンパー姿でせかせかあっちこっちと歩き回り、点検、撒き餌、竿の調整と見るからに名人、漁師のようである。このオヤジ、毎日のように何匹か鯉を釣り上げているんじゃないかね、一度釣ったやつとも顔なじみで、「なんだ 又 お前か」なんて愛想を振りまきながら写真を撮っている顔を想像する。丁度その場所は下水場の水が流れ出すところ、いささか匂う水、ホンワリ色付いた水、この水が栄養価が高いのか、このあたりにはいつも水鳥たちが集まっている。彼らが集まるということは水面下で植物も小型の生物もおおいに繁殖しているに違いない。

◎「おおお 雨の中 黒い上下のあんちゃんが 向こうから走ってきた こんな雨なのにごくろうさん」
40歳ぐらいかな？そこそこ足も上がって、歩幅も伸び、まさに走っている。

僧依毗沙門助令産金得便語 27-44<そう びしゃもんの たすけによりて こがねを むましめて
たよりをうる>

◎毘沙門天（別名：多聞天）：武神、四天王のひとり（持国天、増長天、広目天）、七福神のひとり（大黒天、恵比寿、弁財天、布袋尊、福祿寿、寿老人）坂上田村麻呂、楠木正成、上杉謙信、武将が信仰した武運長久の神。金運等の福の神でもある。

インドの神様で仏教に取り入れられた。

◎四天王の画像を見て、鋭い目、武器を持ち、鬼（邪鬼）を踏みつけ睨みつけている。「おお これの事か」と嬉しく納得。十二神将は：薬師如来（薬壺を持ち病氣平癒、長寿を願う）を守護する 12 人の神、もとは仏教の敵である夜叉、鬼、悪魔であったが、仏の教えを聞き調伏され改心した。

この話を読み、うれしいことに文中になかなか色っぽい話が満載されている、わくわくである。それと、奈良へこれらの仏像を見に行ってみたいものだと思案中。

◎出雲路：京都下賀茂神社付近。弥生後期、奈良時代から出雲出身の人が住んでいたらしい。

◎今は昔、比叡山の〇〇に一人の僧がおった。すぐれた学僧であったがこの上なく貧しかった。ちゃんとした檀家なども持っていないので、山にも居られず、のちには京に下って来て雲林院というところに住んでいた。

<中略>生活にも事欠くありさまであった。そこでそのことをお願いしようと、長年の間鞍馬に参詣を続けていた。

<中略>ある時、鞍馬に参詣しその帰途、出雲路あたりまで来て日が暮れてしまった。供には貧相な小坊主一人連れていた。月が非常に明るかったので僧は早足に帰路を急いでいたが、一条の北の小路にさしかかった時に、年のころ十六、七歳ぐらいで容貌美しく、好ましい様子をした少年と道連れになった。少年は白い着物を無造作に着、紐で腰のあたりを結んでいる。僧は、どこぞへ行く稚児であろうが、供に法師なぞ連れていないのがおかしいと思っていると、その少年が近くに歩み寄り、僧に、「お坊様は何処においでになるのです」「私を連れて行ってください」「ぼっちゃん わたしはあなたを存じ上げないので やたらお連れするのは・・・」「親しくしていた僧とも仲たがいをし 両親は死別しております」「わたしを愛おしいと思ってくれる方についていきたい」僧が、それは嬉しいと一緒に歩きながら、少年がひどく美しかったので心奪われた。

<中略>雲林院に帰り着き、僧はかたわらによりふし話などしながら寝た。

隣の僧たちがこの少年を見て、驚きほめたたえた。

僧は少年をひたすらかわいがり、離れず深く愛おしんだ。

僧はふと怪しいことを感じ、「私は生まれて以来 母以外女の肌に触れたことがない」「不思議です」「稚児たちとちがって なんだか心がとろけそう」「もしやあなたは女では・・・」

少年は笑って、「もし私が女なら 親しくしていただけないでしょうか」

僧は、「女なら ご一緒にいては 人がどう申すでしょう」「後ろめたい 仏様がどうお思いになるのか・・・」

少年は、「あなただ進んで罪を犯したら 咎められるでしょう」「たとえわたしが女でも あなたは童と仲良くしていると思っていればいい」とおかしそうにしている。

僧はこれを聞き、やはり女だったのかと思うと、恐ろしくもあり、深い後悔の念にかられた。しかし、身にしてみても愛おしく、可愛く思われたので、帰してしまうこともせず、こう聞いたのちは僧はよそよそしげに、着物を隔てて寝てみたが、僧もやはり凡夫の悲しさ、ついに打ち解けて睦み合う仲になってしまった。それ以後というものの、僧は、「どんな美しい童だといっても これほど愛おしくかわいい人はおるまい こうなるのも何かの前世の因縁であろう」と思いながら過ごした。

隣の僧たちも、「あんな貧しい僧が どうして素晴らしい若者を手に入れたのだろう」とはなしあった。

後に女である童は赤子を生んだが、それは黄金で僧は裕福になっていった。全て毘沙門天の謀であった。

かれここに、アマテラスオオミカミ、みかしこみ、
 天に岩屋の戸を開きて、刺しこもろましき。
 しかくして、高天が原みな暗く、葦原中つ国ことごとく闇となる。
 これをもって、八百万神、あやめやすの河原に神集ひて、タカミムスヒの神の子、
 オモヒカネの神に思はしめて、とこよの長啼き鳥を集めて、鳴かしめて、
 あやめやすの河の河上のあめのかたしはを取り、
 あめのかなやまのくろがねを取りて、
 カヌチのアマツマラを求めて、イシコリドメノミコトにおほせ、鏡を作らせ、
 タマノオヤノミコトにおほせ、やさかの勾玉のいほつのみまする珠を作らしめて、
 アヤノコヤノミコト・フトタマノミコトを召して、
 あまのかぐやまのまおしかの肩をうつぬきに抜きて、
 あまのかぐやまのあめのははかを取りて、
 占いまかなはしめて、
 あまのかぐやまのいほつまさかきを、
 下つえにしらにきて・あおにきてを取りしでて、
 このくさぐさの物は、フトタマノミコトふとみてぐらと取り持ちて、
 あめのこやみのこと、ふとのりとごとほきもうして、
 アメノタチカラオノカミ、戸のわきに隠れ立ちて、
 アメノウズメノミコト、たすきにあめのかぐやまのあめのひかげをかけて、
 あめのまさきをあづらとなして、
 たぐさにあまのかぐやまのささの葉を結いて、かむがかりして
 むなちをかきだし、ものおをほとにおし垂れき。
 しかくしてたかまがはらとよみて、八百万の神、共にわらふ。

◎スサノヲの行いはますます凶暴になっていった。アマテラスが機織り小屋に入っていた時、スサノヲがその小屋の屋根に穴を開け、剥いだばかりの馬の皮を投げ入れた。機織り女が機から転げ落ち死んでしまった。これを見たアマテラスは辛抱しきれず、天の岩屋の戸を閉めて隠れてしまった。アマテラスが隠れてしまったので、高天が原も、葦原の中つ国も、真っ暗になり、悪しき神々の声が響き、禍が起こりだした。
 困ったものだとは八百万の神々が天の安の河の河原に集まり、タカミムスヒの子、オモヒカネに相談した。
 オモヒカネはじっくり考えた末、ニワトリを集めて鳴かせた。
 堅石（かたしわ：金床用の石）を取って来てよ～。真金（鉄：砂鉄）を取って来てよ～。鍛冶屋のアマツマラ（立派なマラを持つ）、イシコリドメ（マラを硬くする）に鏡を作らせよ～。勾玉、玉飾りを作らせよ～。雄鹿の骨で占う。
 まさかき（櫛）の八尺の勾玉、たくさんの玉を取りつけ、シロニキテとアオニキテを垂らし、いろいろ取り付けた櫛を、フトダマが捧げ持って、アメノコヤネが祝詞を唱える。
 力持ちが岩屋のわきに構え、アメノウズメが色っぽい踊りを披露する。ウズメの踊りを見て八百万の守は大喜び、その声を聞いたアマテラスがそっとのぞき見る。
 力持ちにアマテラスは連れ出され、やっと明るさが取り戻せた。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎天孫降臨

◎さて、タカミカツチの返り語とを聞いたアマテラスとタカギの神とのお二人は、あらためて日継ぎの御子マサカツアカツカチハヤヒアメノオシホミミに向こうて、

「今 ようやく芦原の中つ国を和らげ終えたとの知らせがあった そこで 先に言葉を寄せて委ねたとおりに中つ国に降り居まして、総て治めなされ」と言葉を寄せられた。

すると、その日継ぎの御子は、いやだと駄々をこね・・・、

「私が降りようと装いを整えている間に 子が産まれてしまいました 名は アメニキシクニニキシアマツヒコヒコホノニニギと申します この子を降ろすのがよろしいかと思ひます」

◎アマテラスの御子：マサカツ アカツ カチハヤヒヤメノ オシホミミ：オシホミミ

アマテラスとスサノヲのうけひで、スサノヲが勝ったと喜び名付けた。

ホは稲穂。ミミは実をいっばいつける。

スサノヲがアマテラスの勾玉の髪飾りを噛み砕いて吹き出した。この時左の耳飾りから生まれた神。勾玉の持ち主がアマテラスなのでアマテラスの子としている。スサノヲが、「正しく勝った 私が勝った」と宣言し、「正勝吾勝勝速日」「勝つこと日の昇るが如く早し」という意味らしい。

たくさんの実をつけ頭を垂れる稲穂の神様。英彦山神宮などで祀られている。

◎アマテラスの孫：アメニキシ クニニキシ アマツヒコヒコ ホノニニギ：ニニギ

アメニキシ：天を和らげ、国を和らげる。

クニニキシ：天空の日の御子。

アマツヒコ：素晴らしい賑わい。

初代天皇：カムヤマトイハレビコ（神武）の曾祖父にあたる。

◎そこで、アマテラスは、ヒコホノニニギに声をかけた。

「この豊葦原の瑞穂の国は なんじが統べ治める国であると」父オシホミミの言葉と共に委ねられた。「さああらためて わが言の葉のままに 降り 行きなさい」と仰せになった。

◎ニニギが天下りしようとしたが、下を眺めると見知らぬ神が待ち受けていた。

「なんだあれは 敵か 味方か・・・怖いよ～」

◎それで、アマテラスとタカギの神のお言葉で、アメノウズメに仰せになることには、

「なんじ か弱いおなご神ではあるが 向かい合うと 面で勝つ神である ゆえにひとまず なんじが 先立ち行きて尋ねることには 我が御子の 天下りしようとする道を 誰が遮るごとくに おるのか と 問うてまいれ」

◎サルタビコ：猿田彦

異形の神、鼻が126センチ、背が12メートル。口と尻が光り目はほおずきのようなだ。

眼力で猿田彦を負かしたアメノウズメが後に、猿田彦と結ばれる。ニニギに猿田彦を伊勢に送って差し上げよと言われた。のちにアメノウズメはサルメノキミ（猿目君）となる。朝廷で大嘗祭や鎮魂祭で神楽を奉納する巫女を出す氏族となる。猿田彦はあっけなく溺れ死んでしまう。

- ◎8:20 歩き出した。まっすぐアオガレ、金糞峠、武奈ヶ岳、北比良峠と時計回り一周の山行予定。同道は八尋、山岡、谷口の4名様である。車でイン谷口にやって来るのは久しぶり、道路の崖崩れが一年足らず復旧しなかったせいもある。晴れと思っていたら、前日予報を見てびっくり、武奈ヶ岳はCランクである。風速10M、気温は零度ぐらいと、「天気はいいが 風がきつく冷えるよ」ということらしい。半月前の北小松駅から釈迦岳の時も同じようなアナウンス、当日は誰とも会わずトレースの無い雪の上をワッセと登った。
- ◎9:10 アオガレ下の砂防ダムに着き一服。昔はここまですっ飛んでこれたねえ、ところが今日はすでにふー一言っております。いつもの定点、北小松コースを知らなかったの、比良と言えばここを登っていた。何年か前に金糞峠から、コヤマノ岳にまっすぐの尾根道を知り今はそこをよく利用している。それまでは左の谷筋を中峠まで行ってそこから右折した。天気予報通り寒い、手袋が欲しい冷たさ、防寒具は脱げない。先日も金糞峠下で雪崩事故があったらしいが、なんとか脱出したらしい。このコース、金糞峠までは川筋の道なので、大雨が降れば道があっちこっちに変わっていく。
- ◎もうちょいだと空を見上げながら金糞峠着。一本取って10:15出発。「ちょっと下って 八雲の方にはいかず 川を渡って まっすぐ登るんだ」口で復唱しながらそのまっすぐを探した。雪が多い、足跡がない、どこだ何処だと迷いつつ、「岡村さん そっちじゃないよ」「いやいや こっちだよ」いつものようにいささか迷いつつ、「どうも これじゃない」という踏み跡が正解のようだが、「こんなに 曲がり ぐねって いたかな」なんて疑いつつもスマホの地図では登山道の上を進んでいるようで、急な斜面を登っていく。
- ◎コヤマノ岳あたりまではスギの植林地帯、植林された木々の間に太い幹の杉があちらこちらにある。「ええとこの杉は なんとというのだっけ」とそこまで出かかった固有名詞に詰まりながら、「小野割村岳だよ」と助けられ、「芦生杉 伏状台杉」という奇怪な杉の木いくつか見られる。元は一本の杉から4.5本の幹を伸ばし順繰りに伐採することで永久に材木が採れるという仕組み。その仕組みを利用せずほっておいたのが奇怪な巨大台杉で、樹齢300年500年と今見られる大杉になったわけである。
- ◎中峠あたりから景色がいっぺん、オレの好きなブナ林になる、あたり一面雪、しかも昨日降ったばかりなのか幹にも枝にも雪が氷がへばりつき樹氷の世界。お陽さんが出てきたが冷たい風が吹く、枝々の雪が半分凍ってキラキラ光りの世界、白銀の世界、オレの世界だあ。「うわああ これが見られて最高だ」オヤジ悦ぶ。
- ◎「しまった スマホで 動画を撮り忘れた」昼飯を食って戻って来た時には枝々の氷は溶けて無くなっていた。せっかく戻ったんだからと撮った。
- ◎12時過ぎにてっぺんにやって来た。「えええ すごい 枝々に 氷の とげとげ すごいすごい」「岡村さん それ とげとげ じゃなく エビのしっぽ」ガハハまさにエビのしっぽである。先ほどからの風が多少収まり、これなら風の当たらない所で弁当が広げられる。少し窪んだ所でシートを広げて座り弁当を食べ始めた。オレはコップに粉末スープを入れ、テルモスの湯を入れた。よくかき混ぜトマトスープを飲んだ。湯が冷めている分、フーフー冷ますこともなくゴクリ飲んだ。いつもの梅干しごはんとお卵とじ野菜炒め、スープがあるとゆっくり噛みしめて味わえる、美味しい。
- ◎1時に降り始めた。コヤマノ岳からまっすぐもと来た道を帰れば早いのだが、いつものようにスキー場から北比良峠に行こうと決めていたので進みだした。「あれれ トレースが ないような あるような」何度も通った道なのに雪で覆われると地形が替わり、「こんな道だっけ・・・」とスマホを見ると間違いなく登山道の上を進んでいる。「ちょっと はずれた」「このまま トラバースしたら」「いやいや この ちょっと下が登山道かな」「おお 道に出た これだよ 正解だよ」
- ◎スキー場のあとは大きな溝が何本もあることは知っていたが、そこを踏みぬき足が嵌まってしまった。「それ 抜け あれれ抜け 抜け 抜け 抜け 抜け 抜け」なんとそこを脱出するのに10分ほどかかってしまった。踏みぬいた時に、ズボリ墜ちた感じ、足が雪の塊に固定され動かない、「そんなばかな・・・」と笑いながらもこのがっしり固まりには驚いた。雪崩で閉じ込められたら、身体を固められたら怖いねえ。山行9時間でした。

104 ぼやき 1224

◎いかに生きるべきか この問いは 昔から語られている

若いころは 少しは考えた

千人いれば 千個の生きざまがある

自分自身も その中のひとつなのかな